

特集 手話の世界を めぐる

目に見えることば「手話」。その世界はじつに奥が深い。今号の特集では、手話を日常的に使っている研究者の目線から自身の生活、仕事、調査等において印象に残ったエピソードを紹介していく。手話が誰かの日常に存在する「ことば」であることが見えてくるだろう。

手話の世界へ ようこそ

菊澤 律子
きくさわ りつこ

民博 人類基礎理論研究部

手話のむこうに広がる宇宙

通学経路のどこかにろう学校があったのか、高校時代、わたしはよく、手話でいきいきと会話をする生徒さんたちを見かけた。電車の窓を隔てた中と外で、駅のホームとホームで、声が届かない場所でも自由に会話を続ける彼らは、とてもうらやましい存在だった。歳月を経てここ数年は、手話

言語法の制定やいわゆる差別解消法の施行など、手話に関する話題を頻繁に目にするようになり、昨二〇一六年には、民博でも「みんなく手話部門」(正式名称・日本財団助成手話言語学研究部門)が発足した。手話やその話者とかかわりはじめてみれば、そこには外からは見えない世界が広がっている。

そもそも「手話」とよばれるものは、一様ではない。日本語を音声で話しながら手を動かす方法は、「日本語対応手話」とよばれ、日本語の表現方法の一種である。これに対し、ろう者が使用する「日本手話」は、主語や目的語などの標示に空間を利用するなど、異なる文法構造をもっていて、日本語と同時に発話することはできない。独自の概念や言語行動満載で、外国語を学び、はじめて使えるようになったときの、あのわくわく感を感じさせてくれる。一方で、日本手話とは接点のな

語に基づき、ひとつの民族と位置付けられるはずだ。かくて、日本手話話者は「ろう者」とよばれる者が共有する文化や帰属意識は、「ろう文化」とよばれるようになり、「日本における最大多数のマイノリティ」として、医学的な意味で耳が聞こえない「聴覚障がい者」と区別されるようになった。一九九〇年代後半に発達したこの考え方は、ろう者の自身の言語に対する見方に大きな影響を与えることになる。同時に、ろう者にとっては日本語が第二言語であること、手話言語が音声言語からは独立した歴史をもつことへの理解にもつな

がった。例えば、アメリカ手話はフランス手話の系譜を引いており、台湾手話や韓国手話は日本手話の影響を強く受けている。

ここでも、わたしたちは手話にまつわる多様性から解放されはしない。音声言語の場合に自然に起こる言語継承でさえ、手話の世界では一律ではない。親がろうで子どもも聴こえなければ、日本手話を文字どおり「(父)母語」として習得する。けれども、聴こえない子どもも多くは聴こえる親に生まれ、手話を家庭の外のコミュニティで身に付ける。一方で、ろうの親に生まれ、日本手話を習得した聴こえる子どもは、言語も文化も共有しているのに、「ろう者」ではないのだろうか？

多くの日本語話者の暮らしと異なり、言語接触が日常的であるのもまた、手話の世界だ。そこには「筆談」も含まれる。両手に加え、顔の表情、口の形や上半身の向きなど、同時に複数の器官を使う手話言語には、書記法がない。日本手話話者がメモをとるときには書記日本語を使う。ろう者にとって「読み書き」という行為が二言語併用であることに気づけば、筆談や字幕と手話の関係についても、これまでと違う側面が見えてくるのではなからうか。

手話のある暮らしをめぐる

そして手話にはもちろん、人間が使うことばとして音声言語と共通の特徴がある。国内には地域や社会方言差があり、国外に目を向けてみれば、世界で使われる手話言語は、約三百とも四百とも



手話での会話風景。音声を使う会話とは位置のとり方や話者間の距離が異なっている



みんなく手話部門ロゴ(平林裕一作成)
Minpaku Sign Language のイニシャルM, S, L
で民族を表す手話を表現したもの。部門の手話名を表現しているようにも見える。SILLR(シラー)は英文名Sign Language Linguistics Research Sectionの略称。

い地域に聴覚障がい者がいると、身振りによる意思疎通の方法が新しく発達する。それは地元でのみ通じる記号の集合体であり、「ホームサイン」「ピレッジサイン」とよばれる。

言語としての日本手話、民族としてのろう者

日本手話が言語であるならば、その話者は、言



手話言語学事業における講演者と通訳者の打合せ風景。
具体例の確認は、正確な通訳のためには必須である

いわれている。新たな世界の探求の対象としては十二分といえる。日本語話者のわたしたちが英語や他の外国語を学ぶように、日本手話を使うろう者は、外国手話を身に付け、駆使して世界を飛び回る。

文化も生物も言語も、何でも多様な方がいい。手話は、これまで音声の世界に閉じ込められてきたわたしたちを、視覚の世界に解放してくれる。本特集で紹介するのは、日本手話を使って暮らししている人たちの話である。理屈はともかく、まずは、その豊かな世界をめぐるみてほしい。

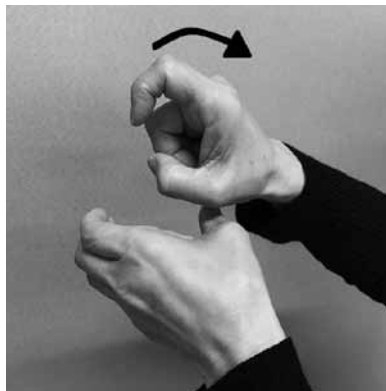
手話をとおしてみろ 新しい世界

木村 晴美

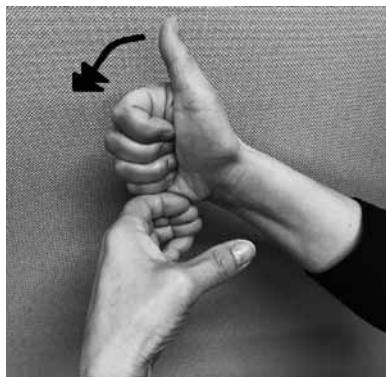
国立障害者リハビリテーションセンター学院
手話通訳学科教官

ジェネレーション・ギャップ

言語は世界を映し出す。手話は特にその傾向が強いのではないかと思う。同僚に二〇近くも年下のろう者がいるのだが、悲しいことに手話をとおしてジェネレーション・ギャップを感じる 경우가少なくない。その一例を紹介しよう。「コップを置



ステイオンタブで開ける



缶切りで開ける

く、「本を並べる」といった文では特に感じないが、缶のように進化するモノの場合、同一の缶のことを指してはいても、「缶を開ける」という文で、わたしと同僚の表現は異なる。まさにジェネレーション・ギャップだ。彼は「ステイオンタブで開ける」、わたしは「缶切りで開ける」なのだ。わたし自身も実生活ではプルトップ缶やイージーオープン缶を使っていて、缶切りの出番はほとんどないのだが、手話だとどうしても「缶切りで開ける」となる。手話にはろう者の世界観が映し出されているが、同じ日本手話ネイティブでも世代によって異なるということだ。ちなみに同僚は缶切りを使ったことがないという。

奄美大島での体験

むかしのことになるが、奄美大島に調査に行ったことがある。そこで不学のろう者と話す機会があったが、彼のホームサインがわからない。そこで鹿児島のある学校に行っていた彼の子どもに翻訳してもらった。彼は漁師で、島の人達とはホームサインで会話していた。獲った魚をセリに出すときも市場でのやりとりにも不自由はなかった。切り身のバッ

クしか見たことがない都会育ちのろう者は「魚」(イカ)「タコ」などのわずかな手話しか使えない。だが、そのろうの漁師は、イカひとつとっても、水イカ、甲イカ、ヤリイカ、スルメイカなどといった手話名をもっていた。サトウキビで生計を立てているろう者もいて、サトウキビにも手話名があることに驚いた。本州には生息しないハブにも手話名があった。生活に密着したモノには必ずそれを表現する語があるというということだ。だが、残念ながら、わたしはその語を正確に再現することができない。手話が文字をもたない故の悲劇だ。

手話で世界を語る

幼いころは日本語からかけはなれた手話を使っているとかバカになると思っていた。大学入学のため上京したわたしは、手話サークルに顔を出し、見よう見まねでいわゆる日本語対応手話を覚えた。たまに帰省すると、親やその友だちから「都会の手話だね」と言われた。だが、聴覚障害学生の仲間からは「ろう者っぽい手話でいいね」と正反対のことを言われた。アイデンティティが揺らいだ時期もあったが、手話が音声言語と同じくらいに複雑で洗練された言語であることを知ったわたしは、手話でバカになるなんてとんでもない、手話で世界を語ることができると考えているようになった。そして、手話にも世代変種、地域変種、社会変種がある。手話を探求するということは新しい世界を切り拓くことだ。

「手話」とは コーダにとっての

中津 真美

東京大学バリアフリー支援室特任助教

手話とコーダ

ろう者は手話という言語をもち、それを自分たちのことばであると語る。しかし、ろう者に添いろう者のことばをともに使用してきた、ろう者以外の一群がいる。コーダ(聴覚障がいのある親をもつ聞こえる子ども: Children Of Deaf Adults)である。

聞こえない親が手話を使用するコーダの場合は、産まれたときから日常生活のなかに手話が存在する。コーダは、親の手話を真似、親と手話で日々の他愛もない出来事を話し、ときには手話で喧嘩もしながら、手話を介して親との関係を紡いでいく。

自身の手話をめぐる過程

わたしもコーダの一人である。よく周囲から、「いつから手話を使い始めたの?」と尋ねられることがあるが、記憶にはない。わたしがいちばん初めに覚えた手話は、「終わり」だそう。お腹がいつ



コーダと聞こえない親の日常: 手と目でお話

ばいになると、両方の手のひらを上に、下に移動させながら窄める。「終わり、終わり」。そして親は、わたしにご飯を食べさせるのを止める。このようにして、わたしは親との日常から自然に手話を獲得していった。もっとも、コーダの手話獲得の程度には個人差が見られ、わたしの弟など手話はほとんどできないが、それでも親の手話は読みとり、「風呂」「新聞」「学校」「遊び」などの

簡単な手話を交え、親に意思や感情を伝達していた。やがて青年期に差し掛かるころには、わたしは外でも積極的に手話を使うようになり、子どもながら社会に手話を広めようとした。一般に青年期は、自己意識の高まりから他者と自己との相違に敏感になる傾向にあり、コーダでは手話を使ったがらなくなる事例も見受けられる。このことは、日本のコーダにおいて、より顕著に見られる特徴であろう。けれども、わたしは違った。我が家には手話ということばがあると、明確な志向をもち続けた。

コーダのアイデンティティと手話

なぜわたしは、手話を使い続けたのだろうか。今改めて過去に思いを馳せると、「自分とは、音声日本語をもつ聴者であると同時に、手話という言語をもつ、ろう者の世界をも知り得る存在」であることにアイデンティティを置き、それが自分の強みと意識していたことが大きいと思われる。このことは、わたしが、手話に誇りを抱く親の姿勢を見て育つことができたからに他ならないと考える。

コーダにとって手話とは、自分と親とを繋ぐことばであると同時に、聴者社会に身を置きながら自己のアイデンティティを保ち続けるための手段であるのかもしれない。

聴者が手話を学ぶ

第二言語としての 日本語習得

飯泉 菜穂子
いづみ なほこ

民博 人類基礎理論研究部

聴者が手話を学ぶということ

人口一億二〇〇〇万を越える日本人のうち、手話母語話者は多く見積もっても十万人、言語学的に厳密に日本手話ネイティブを算出すればわずかに数千人という立場もあるほど、手話は非常に小さく狭いコミュニティの言語である。音声がないことが当たり前というそのコミュニティには、当然、聴者とはことなる行動様式（文化）がある。わたしは、聴者が第二言語として手話を本気で学ぶということ、日本国内に居ながらにして別言語・別社会・異文化への留学を果たすようなものだと思っている。

わたしがろう者・手話と出会ったのは一九八一年。十代最後の年だった。八〇年代前半というのは、米国から遅れること二〇年、ようやく日本にも手話言語学という学問領域が紹介され始めたばかり……。ろう者集団さえ「手話は言語である」



「みんなく手話言語学フェスタ2015」の様子（壇上右側が筆者）

という共通認識を未だ確立していなかった時期である。日中は同世代の学生であるろう者と、夜の時間や週末は年齢も社会的な背景もさまざまな地元のろう者とともに手話漬けの時間を過ごすようになった。今思えば、異文化留学だ。

手話は言語という実感

手話は話者の属する世代、性差、出身（習得）地、教育歴などによって変種をもつことに気づく。手話による非常に微妙な感情のやりとりや複雑な議論を目的にしたりする。こんなに豊かで複雑で「難しく」て魅力的なコミュニケーション手段

台湾での フィールドワークを はじめるまで

相良 啓子
さがら けいこ

民博 人類基礎理論研究部

二〇一六年の秋、初めての海外でのフィールドワークを台湾でおこなった。日本手話と台湾手話は、歴史的に関係が深い言語である。一八九五年からの五〇年間、台湾が日本統治下におかれていた背景があり、日本のろう学校の教員が台湾へ渡り手話を普及させたため、台湾手話は日本手話と似ているといわれている。両者の類似点と相違点に次第に興味をもつようになり、それが現在の自分の研究テーマとなった。

信頼関係を築く

フィールドワークには、現地での計画や研究資料を作成するなどの準備が欠かせない。わたし自身がろう者なので、現地のろうコミュニティに接触しやすいというメリットはある。しかし、日本手話と台湾手話は、似ているとはいっても異なる言語である。まして、ろう者が国際交流をおこなう際に使用する

国際手話（ヨーロッパを中心として発達したもの）がうまく通じず、英語を公用語としない台湾で、どのようにフィールドワークを進めることができるのかという不安はぬぐえなかった。より良いフィールドワークをおこなうためには、現地の手話話者やその関係者との信頼関係は何より重要である。信頼関係は、お互いに共通することばを使ったりとりを積み重ねていくなかで、築かれていくものである。このやりとりをどう進めていくのか、工夫が必要だった。

試行錯誤を重ねる

ーT化が進んだ現在、スカイプやラインなどのアプリをとおして、国が違ってもパソコンや携帯の画面にお互いの姿を映して手話でやりとりをおこなうことが可能になった。試しにスカイプを使ってやってみると、日本手話でコミュニケーションをとるところまでは通じにくい。その場合は、ラインに日本語と中国語（繁体字）間の翻訳ソフトを導入し、文字でやりとりをする。しかし、誤訳がまざっているため、その誤訳をモトにさらに想像を働かせて相手の言いたいところを読み取り、改めて画面の手話で確認をする、というその繰り返しややりとりが必要となった。日本手話と台湾手話の語彙をまぜながらつなぎ合わせて話す現地ろう者の手話を読みとり、こちらの理解にずれがないかどうか内容を確認する。そして、日本手話とあちらから届いた台湾手話の語

が単なる身振りやジェスチャーの集積などということはない。わたしたち聴者の使っている音声言語とは別種の、独立した、「言語としかいいようのないもの」である。そういう実感・体感が積み重なっていったものだ。

異文化への敬意

一般に、ろう者と聞くと多くの人はまず「障がいをもつ」人と理解するのではないだろうか。しかし、ろう者⇨手話話者ばかりのなかに聴者が自分一人だけという状況を想像してみたい。そのような状況下では、手話をどれだけネイティブに使いこなせるかがキーになり、『障がいをもつ』のは手話に習熟していない聴者である自分ということになる。障がい者と非障がい者、マイノリティとマジョリティ、立場が一瞬にして鮮やかに逆転するのだ。

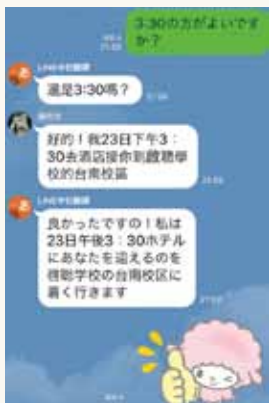
言語畑の専門家の人びとは「言語には大小はあっても上下はない」という。とびきり大きな言語である日本語を母語とし、とりわけ小さな言語である日本語の世界に異文化留学したわたしの実感にびたりと寄り添ってくれる表現だ。第二言語習得に終わりはないという謙虚な気持ちと小さな言語を話す異文化集団への敬意、手話・ろう者・ろう文化との出会いへの感謝をもち続けたい。感謝を形にし、ろう者社会にどう還元するかを考え続けることがわたしの役割なのだと思うている。

彙をまぜて、相手の反応を見ながら、こちらからの要望を丁寧に伝えていくことを繰り返し、どうにか準備を進めていった。

今回協力して下さった方は、多忙な方であったため、連絡がつくのがどうしても夜遅くになってしまった。そのため、ベッドに入った後にブルブルと携帯が震え、パジャマ姿でテレビ電話をすることになったが、限られた時間のなかで準備を進めるためには、外見を気にしてなどいられなかった。こうしてようやく無事に現地で台湾手話を調査する運びとなったのである。



ようやく実現した現地調査（中華民国聾人協会にて）



ラインで翻訳ソフトを導入しながらやりとりした記録

日本手話と 香港手話を 比べてみると

池田
ますみ

みんなく手話部門研究支援事務補佐員

五年間の香港留学の経験にもつき、ここでは、日本手話と香港手話との共通点や違いをエピソード付きで紹介しよう。

基本語順

日本手話 例：私、日本、帰る
香港手話 例：私、帰る、日本

香港手話を使おうとすると、日本手話の影響で語順のミスを繰り返してしまい、どーんと落ち込む。わたしと同じろうのスリランカ人の友人に愚痴をこぼしたら、「スリランカ手話も日本手話と同じ語順なの。わたしも最初の一年は何度も間違いを指摘されたわ。へへ、仲間がいたんだ。」

漢字手話

日本手話の「杉」は、「シ」の形を模写したも

の(図1)、香港手話の「肝臓」は「肝」の「干」の形(図2)。漢字圏特有の語形成法である。



(図1) 日本手話「杉」



(図2) 香港手話「肝臓」

手型も意味も同じ表現をもつもの

これには「文化」(図3)、「理解不可能」(図4)などがある。最初の「文化」は日本手話から強く影響を受けた台湾手話の一部が伝わったのだから、と香港のろう者。「理解不可能」が同じなのは、偶然のようだ。「完全にはわからない」というのを、



(図3)「文化」



(図4)「理解不可能」

たまたま両言語で「訳がわからなくて説明しようがない」と示すようになったのだろう。



(図6) 日本手話「朝飯前」
香港手話「(金銭的に)難なくできる」



(図5) 日本手話「大丈夫/できる」
香港手話「両方大丈夫」

かかわることしか使えないんだ。

手型が同じで意味がまったく異なる表現

意味の違いを知らないと大変なことになりかねない例もある。

日本人Aさん(女性)は、Bさん(男性)に香港手話で「Aさんって日本手話も英語もできてすごいな。あなたはまだ学生なのに。見習いたい」と言われて、「何っ!？」とびっくりしたそう。プロポーズされたと思ったらしい。Bさんの発言を「あなたと結婚したい。ずっとついていきたい(つきまといたい)」と解釈してしまったのだ。香港手話の「学生」は日本手話では「結婚」、「見習う」は「つきまとい」の意味なので、Aさんが驚いたのも無理はない。

音声言語にも並行する事例がある。類似点が見られたり、部分的にずれていたたり、まったく違っていたりして、ことばというものは、観察するのも、使って暮らすのもおもしろい。

手話展示の空間と時間

井上史雄

東京外国語大学名誉教授

「言語を展示する」とは

国立民族学博物館の展示に手話が加わっているという。画期的なこと、最先端に行く展示といえる。他館のモデル、将来の見本になる可能性がある。手話は理屈からいうと展示が困難で、新工夫が必要である。これを空間と時間という観点から位置づけよう。

博物館の展示物は、かつては古いモノや死んだモノで、動かなかった。空間を使って見えるモノを並べた。それに対して、ヒトの話しことばは、目に見えないので展示しにくい。音が時間軸に沿って伝わるので、話しことばそのものを聞かせようとしたら、空間は少ななくてすむが、時間がかかる。今民博でやっているように、機械から音を聞かせるのが正道である。音だけだと聴きとりにくいこともあるので、画像に字幕で文字を添え、意味を示すために翻訳を文字で示すことが多い。文字だけなら二次元の空間に並べることができ、切り離して壁に展示できる。時間の次元を離れ、空間を使い、動かない。

手の動きや表情を展示する

ところが、手話言語は、意思伝達の手段として音声言語と似ているが、使う次元が多い。手話には手や体の動きがあるので、時間と空間を同時に使う。文字は二次元の紙に示せるが、手話は紙の上では十分にあらわせない。けれども最近の技術の進歩で、動画を活用できるようになったので、手話は展示の最先端に行くことになった。民博では、手話が画面に動きを伴ってあらわれる。これまでの本の解説は、挿絵に矢印がつく程度が多かったの



民博言語展示の字幕付きビデオ画面

よりよい展示を目指して

とはいえ、現展示には改良・発展の余地がある。館内三か所に手話展示があるが、わかりにくい。壁に掲示して相互参照を入れ、他の手話展示があることを示すが、古風だが、ひとつの手段である。他コーナーの関連展示がパソコン端末に出れば、もっといい。

手話はビデオテークでも見られる。ただしビデオテークの最初の画像では手話にたどり着けない。大目次だけでなく、細目次を出すとか、サムネール式に小さな画像を出すと、五十音の索引形式の画像で全体を示すとか、親切な工夫が必要だ。

本来なら、言語と音楽の部門は、ビデオテークともつと密接に結びつくべきだった。今の技術なら可能だ。展示コーナーにデジタルフォトフレームなどを置いて、ビデオテークの関連画像を瞬時に呼び出せるようにすればいい。このアイデアは全館に活用できる。館全体をネットワークで結ばばいい。展示物のそばのスイッチを押すと画面に映像が出て、音が聞こえるようになれば、インタラクティブで楽しいではないか。利用者が好みと必要に応じて、情報を受けとれる。手話の展示を考えると、展示方法が「博物館入り」にならないですみ、民博全体の革新につながる。



民博言語展示入口。左側にビデオ画面